

# 漢字の意味について

武 部 良 明

## 1. 考察の観点

漢字学習の難しさの一つは、その字種が極めて多いということである。日常用いるのが三、四千といっても、学習者としては、次から次と新出する漢字に追われるわけである。それを組み合わせた漢字熟語となるとほとんど無限であり、辞書もその採録に追いつかないくらいである。

しかし、新出の漢字熟語についてそのつど個別的な学習を要するかというと、必ずしもそうではない。それは、多くの漢字熟語の意味がそれを構成する漢字の意味の組み合わせによって成り立つからである。このことは、実は、個々の漢字についても同じである。それは、基本的な漢字が直接意味を表すとともに、多くの漢字がそれらの組み合わせによって成り立つからである。つまり、漢字そのものが本来は意味を表しているのであり、漢字熟語もそのような漢字の複合なのである。漢字について、ローマ字のような音と結び付いた文字と同じように扱おうとしても、学習の効果が上がらないのは当然である。

そこで、ここでは、そのような漢字について意味との関連を明らかにするため、幾つかの観点から取り上げたいと思う。以下、字体と読み方をそれぞれ意味との関連において取り上げるのはこのためである。そのあと、熟語の構成を取り上げ、また意味の派生関係にも及びたいと思う。こうして、漢字と意味との関連が明らかになれば、学習の負担もそれだけ軽減されるに違いないというのが筆者の考えである。

## 2. 漢字の意味と字体——象形・指事の場合

まず、漢字の意味と字体との関連から取り上げることにする。漢字というのは、象形文字の代表と考えられているように、具体的な事物を表す文字を絵から作ることが基本となっている。したがって、そのようにして作られた漢字の場合は、その字体からその表す意味を読み取ることが容易なはずである。

その場合、複雑な形から簡単な形に整えられて全体の骨組みだけを残すようになったが、それでも「田」や「門」を見て「四角に区切られたタ」や「とびらの付いたモン」を思い浮かべることがそれほど困難ではない。「木」でも「竹」でも、元になった絵との関連を説明されれば、なるほどと思えてくるのである。

ただし、漢字というものが文字として整えられる過程を見ると、そこに結果的に三つの約束事が行われている。その一つは、曲線を用いず直線に改めたということである。一般に絵というものは現在でも曲線を用いることが多いが、文字としては直線を基本として整えられている。そのことは、次のような例を見れば明らかである。

月……三日月のようなツキの輪郭の中に暗い部分が点二つの形で添えられていたが、それが「月」になった。

山……三つの峰を持つヤマの形で示したが、それが直線を基本として骨組みだけを残す「山」になった。

これらを元の絵に還元する場合は、直線を曲線に改めることが必要である。

二つめは、円形を用いず四角形に改めるということであるが、これは曲線を直線化する行き方から導き出される当然の改変である。

口……人のクチの形は平たい円形であるが、それが四角形に整えられて「口」になった。

日……太陽の形は円形であり、中に黒点を表す点を加えられていたが、輪郭が四角形に整えられて「日」になった。

したがって、四角形については、円形の改変ではないかと考えてみること

が必要である。

三つめは、全体が縦形か横形に整えられたということである。これは、それぞれの漢字が四角形にまとめられる過程において行われた改変である。

目・・・メジリのつり上がったメの形は本来は左右とも斜めのはずであるが、それが縦形の「目」になった。

女・・・斜めに前かがみにひざまずいて両手を組み合わせたのが元の形であるから、その背中に当たる部分は本来は斜めのはずである。それが横の「一」になり、そのため両手の部分が下に向いて「女」になった。

したがって、縦形や横形となっても、斜めの改変ではないかと考えることが必要である。

いずれにしても、このような約束事に基づいて漢字を眺めてみると、「鳥」や「魚」からその元になったトリやサカナを思い浮かべることが、決して困難ではない。これが象形文字の特徴である。

なお、象形文字の中には、具体的な事柄を表す文字に関連する絵から作ったものも見られるのである。

大・・・オオキイ意味を表すのに、人が両手両足を広げて立っている形「大」を用いた。

交・・・マジワル意味を表すのに、人が両足を組み合わせる形「交」を用いた。

自・・・鼻を指してジブンを示したところから、ジブンの意味を表すのにハナの形「自」を用いた。

方・・・旗でムキを示したところから、ムキの意味を表すのにハタをハタザオに付けた形「方」を用いた。

これらも象形文字であるが、このような説明を受ければ、特定の意味を表すのにその字体を用いる理由も納得できるのである。

以上が漢字の基本とされる象形文字の実体である。しかし、この種の適当な絵を用いることができない場合には、事柄や事物の関係を記号で示す

ことにもなった。これが指事文字と呼ばれるグループで、数を表す「一・二・三」などがその例である。

指事文字の場合は、直接には絵と結び付かない点で、前記象形文字の場合と異なっている。しかし、その表す意味と字体とが容易に結び付くことに変わりはないのである。

上・下……基本の位置を示す横画「一」のウエにシルシを加えた「上」でウエを表し、シタにシルシを加えた「下」でシタを表した。  
本・末……「木」の下の部分にシルシを加えた「本」でモトを表し、上の部分にシルシを加えた「末」でスエを表した。

指事文字の場合にも改変が行われるから、「中」の四角形の部分が本来は円形であり、「回」の角ばった部分も、本来はウズマキ型の曲線である。

このように見えてくると、象形文字のグループも指事文字のグループも、漢字の字体そのものが直接意味を表す点で共通している。漢字をじっと眺めていると、そこからあるイメージがわいてくる、そのようにして意味と字体と結び付くのが、この種の漢字の実情なのである。

### 3. 漢字の意味と字体——会意・形声の場合

漢字の意味と字体との関連を考える場合、理解しやすいのは象形文字や指事文字のグループである。しかし、実際問題として、象形・指事によって作られた漢字は、それほど多くはない。大部分の漢字は、そのようにして作られた既成文字を組み合わせたものである。こうして、次々と作られてきたのが、会意文字と形声文字である。

まず、会意文字から取り上げることにする。会意文字というのは、二つ以上の既成文字を組み合わせることで特定の意味を表したものである。例えば、「息」や「庫」の場合がこれである。

息……イキをハナから出るココロと考え、ハナを表す「自」とココロを表す「心」を組み合わせた「息」でイキを表した。

庫……クラをクルマなどを入れるタテモノと考え、上と後ろに覆いのあ



るタテモノの中にクルマを入れた「庫」でクラを表した。  
したがって、会意文字の場合は、構成部分の意味から全体の意味を類推することが可能である。「尸(カバネ)」がシリを表すことを知っていれば、「尾」がそこに生えている「毛」としてのオを表し、「尿」がそこから出る「水」としてのニョウを表すことも分かる。そうすれば、一般には用いない「屎」の意味も、シリから出る「米」としてのクソの意味だということが類推できるのである。

なお、このような既成文字の組み合わせは、名詞的な意味を表す文字だけでなく、動詞や形容詞を表す文字にも及んでいる。

看・・・「目」の上に「手」をかざした「看」で、そのようにしてミル意味を表した。

休・・・「木」の横に「人」を添えた「休」で、そのようにしてヤスム意味を表した。

貧・・・「貝(財産)」と「分(わける)」を組み合わせた「貧」で、財産を分けた結果としてのマズシイを表した。

美・・・「羊(ひつじ)」と「大(おおきい)」を組み合わせた「美」で、そのような羊の様子ウツクシイを表した。

こうして、二つ以上の既成文字を組み合わせることにより、数多くの会意文字が作られたのである。

次に、形声文字であるが、このほうは、一般的な意味を表す基本部分に、種類を表す付随部分を組み合わせたものである。例えば、「口(クチの形の象形)」と権力の象徴としての「刀(カタナの形の象形)」を組み合わせた「召」で人を集める意味のメスとしたのは会意文字である。これに対し、「召」を基本部分として組み合わせたのが、次のような形声文字である。

招・・・テヘンを添えて、手の動作で集める意味のマネクを表した。

詔・・・ゴンベンを添えて、言葉で集める意味のミコトノリを表した。

沼・・・サンズイを添えて、まわりの水を集めたところヌマを表した。

昭・・・ニチヘンを添えて、日を集めた様子アキラカを表した。

照・・・それに火を表すレンガを添えて、アカルイだけでなくアツイ意味を加えた動作テルを表した。

形声文字の基本部分は、単に字音(この場合はショウ)を表すだけでなく、共通の意味(この場合はアツメル)も表すわけである。

したがって、形声文字の場合も、構成部分の意味から全体の意味を類推することが可能である。例えば「化」であるが、これはバケル意味を「人」とその逆の「Y」を組み合わせせて表した会意文字である。これにクサカムリを添えた「花」でクサのバケたハナを表し、カワヘンを添えた「靴」でカワのバケたクツを表すのが形声文字である。そういうことが分かれば、一般には用いない「訛」がコトバのバケたナマリを表すことも類推できるようになる、これが形声文字の実情である。

なお、形声文字の中には、基本部分が独立の文字として用いられないものも少なくない。しかし、そういう場合も、基本部分を共有する文字ということで、相互の意味は関連している。例えば、「栽・裁・載」であるが、共通の基本部分は、ホコの形でキル意味を表している。

栽・・・枝をキッテ木を育てることで、ウエル意味を表した。

裁・・・布をキッテ衣を作ることで、タツ意味を表した。

載・・・荷物をキッテ車に積むことで、ノセル意味を表した。

このように考えてくれば、一般には用いない「戔」の意味も、言葉をキッテ感嘆の気持ちを口から出す詠嘆の助詞カナの意味として理解できるわけである。

以上のように説明してくると、象形文字・指事文字の場合には意味の表し方が直接的であり、会意文字・形声文字の場合はそれが間接的だということも分かる。しかし、後者の場合も、その意味に関する情報をその字体から取り出すことがそれほど困難ではないのである。その点では、漢字をじっと眺めているとイメージがわいてくることに変わりはなく、そのようにして字体と意味とを関連づけることが、やはり、効果的だと言えるのである。

#### 4. 漢字の意味と読み方——字訓の場合

次に、漢字の意味と読み方との関連を取り上げることにする。漢字の読み方としては字音と字訓とに分けて考えるのが普通であるが、そのうち、まず意味と字訓との関連はどうかということである。

この場合、漢字の字訓というのは、その漢字の中国語としての意味に当たる日本語が、その読み方として固定したものである。したがって、漢字の意味はその字訓に現れていると考えてよいのである。すなわち、その漢字の意味全体に当たる適当な日本語があれば、それがそのままその漢字の字訓である。次のような字訓も、そのような立場での訳語と考えてよいのである。

山・・・やま      森・・・もり      見・・・みる      忘・・・わすれる  
長・・・ながい      寒・・・さむい

逆にいえば、その漢字の表す意味を日本語で何というかを考えることにより、その漢字の字訓を導き出すことが可能である。「山」という漢字の意味を表す日本語が「やま」であることを知っていれば、「山」を字訓で読むときに「やま」と読んでよいのである。

ただし、それぞれの漢字の持つ意味という立場で考えると、それに当たる日本語が一つとは限らないことになる。「囲」の字訓が「かこむ・かこう」となるのも、「幸」の字訓が「さいわい・さち・しあわせ」となるのも、それぞれの意味に当たる日本語が二つも三つも見られるからである。中には、「上」や「下」のように特に数多くの字訓を持つ漢字が見られるのも、このためである。

上・・・うえ・かみ・あげる・あがる・のぼる・のぼせる・のぼす

下・・・した・しも・もと・さげる・さがる・くだる・くだす・おろす・おりる

これらはいずれも「上」や「下」という漢字の意味に当たる日本語が、その読み方として固定したものである。一般に二つの言語を対照した場合、それぞれの語が意味の立場で 1:1 の対応をすることは少ないとされてい

る。したがって、一つの漢字の表す意味に当たる訳語がいろいろ見られても、それは当然のことである。上記「上」や「下」の字訓も、それぞれの漢字の意味をとらえることにより、その意味を日本語で何というかと考えて導き出すことのできる訳語である。

以上は普通に字訓の用いられる漢字の場合であるが、すべての漢字に字訓が見られるかというと、必ずしもそうではない。中には字訓を欠くものがあることは、「京・央・意・全・応・報」などに見るとおりである。しかし、そうかといって、これらの漢字が意味を持っていないということではない。こういう場合にも、漢字を扱うに当たってはその意味を知ることが重要である。そうして、その意味を記憶に留めるには、詳しい解説よりも簡単な単語と対応させるほうが効果的である。その点では、普通に字訓を用いない漢字の場合も、古くから行われた字訓を参考にする行き方が役に立つのである。例えば、前記の漢字の場合も、次のような字訓を利用するに越したことはない。

京・・・みやこ    央・・・なかば    意・・・こころ    全・・・すべて  
応・・・こたえる    報・・・しらせる

このようにしてそれぞれの漢字の意味を字訓の形で心得ることが、漢字を扱う上でいろいろと役に立つのである。

ところで、漢字を広くその字訓という立場でまとめてみると、同じ字訓を持つものが他にも見られることは、「町・街…まち」「尋・訪…たずねる」「暑・熱…あつい」などに見るとおりである。これが異字同訓の場合であるが、字訓が同じだからといって、その意味が全く同じかというと、そうではない。漢字はそれぞれ独自の意味を持っていて、漢字が異なれば意味も異なるのが普通である。その場合に同訓の漢字が見られるのは、それぞれの漢字の意味を簡単な単語と対応させたからである。したがって、同訓の漢字も、その意味の詳しい解説を求めれば、そこに意味の細かい違いが見られるわけである。

例えば、前記の異字同訓の漢字であるが、そこには次のような違いが見

られるのである。

- { 町・・・人の住む家が集まっているマチ。 ㊦ 町と村 織物の町  
街・・・店などが道に沿って並んでいるマチ。 ㊦ 学生の街 街の明かり  
尋・・・知らないことを明らかにするために他の人にタズネル。 ㊦ 道  
を尋ねる 先生に尋ねる  
訪・・・他の人の家などへわざわざ会いに行く形でタズネル。 ㊦ 知人  
を訪ねる 史跡を訪ねる  
暑・・・体の全体で感じる温度が高過ぎて気持ちがよくないようすの  
アツイ。「寒」の対。 ㊦ 暑い日 夏は特に暑い  
熱・・・そのものの全体の温度が非常に高いようすのアツイ。「冷」の  
対。 ㊦ 熱いスープ 体が熱い

したがって、それぞれの漢字を使い分ける場合には、このような細かい意味の違いに基づかなければならないのである。このことも、漢字が意味を表す文字であると考えれば、極めて当然のことである。

## 5. 漢字の意味と読み方——字音の場合

次に、漢字の意味と字音との関連に移る。漢字の字音というのは、その漢字の中国語としての発音に基づく読み方であるから、その漢字とともに伝わった読み方と考えるべきである。

その場合、日本に伝わった時期と経路により、呉音と漢音を分けるのが普通である。比較的早く仏教とともに伝わったのが呉音で、そのあと遣唐使が中国の標準音として伝えたのが漢音である。こうして、同じ漢字でも、次のように二つの字音を持つものが少なくない。

大…ダイ・タイ	下…ゲ・カ	後…ゴ・コウ
今…コン・キン	兄…キョウ・ケイ	一…イチ・イツ
力…リキ・リョク	去…コ・キョ	口…ク・コウ

しかし、これを意味の立場から取り上げると、いずれの読み方をしてもその意味に変わりのないのが原則である。その理由は、漢字が異なれば意味

も異なるとともに、同じ漢字は同じ意味を持つのが原則だからである。

ところで、漢字の字音が中国語としての発音に基づく読み方であるとするれば、その発音の違いが本来は意味の違いに結び付いていたはずである。それが、日本語の中に取り入れられて細かい発音の区別を失ったことは、英語を外来語として取り入れた場合と同じである。こうして、本来の中国語として発音が異なっていたと考えられる漢字の中にも、同じ字音を持つものが生まれるようになった。それでも、字音仮名遣いが異なれば、かつては異なる字音を持っていた。それが、その後の歴史的な音韻変化を経て同音のものが増えたことは、広く知られているとおりである。そうして、「現代かなづかい」の適用により、そのような表記面での書き分けも失われ、例えば次のような漢字が同音同仮名の字音を持つに至った。

コウ・・・口 工 公 孔 功 巧 広 甲 交 光 向 后 好 江 考...

セイ・・・井 世 正 生 成 西 声 制 姓 征 性 齊 青 政 星...

こうして、普通に用いられる漢字の中にも、同音同仮名の字音を持つものが非常に多くなったわけである。

そのうえ、字音の中には、熟語の前部要素となるときに促音化するものが見られることは、次のとおりである。

石(セキ)・・・石器(セツ)      学(ガク)・・・学校(ガッ)

日(ニチ)・・・日光(ニツ)      発(ハツ)・・・発行(ハッ)

また、後部要素となるときに濁音化・半濁音化・ナマ行化が見られることも、次のとおりである。

産(サン)・・・安産(-ザン)      発(ハツ)・・・出発(-パツ)

応(オウ)・・・反応(-ノウ)      位(イ)・・・三位(-ミ)

このような変化形についても「現代かなづかい」は発音に基づくこととしたため、同音同仮名のものがさらに増えたわけである。

このようにして同音の字音を持つ漢字が著しく増えたことは、漢字の読み方としての字音が意味を表し分ける機能を失ったことにもなるわけである。また、漢字の読み方としては字音と字訓に分けるのが普通の行き方で

あるが、意味との関連で取り上げると、この二つは全く性質を異にすると  
いわなければならない。その理由は、字訓がそのままその漢字の意味を  
表しているのに対し、字音のほうはそのような役割を果たしていないから  
である。

しかし、字音が意味を表し分ける機能を失ったとしても、それぞれの漢  
字が意味を持っていることに変わりはない。その点で、漢字が異なれば意  
味も異なるという原則が失われたわけではなく、したがって、同音の漢字  
だからといって、むやみに融通し合うこともできない。前記例示のように  
「コウ」や「セイ」の字音を持つ漢字がいくら多くても、それらをその意  
味によって書き分けなければならないのである。そうして、このことが、  
漢字の意味と字音との関係をそれだけ複雑にしているわけである。

ただし、そのように同音の漢字が多いといっても、特に紛らわしいのは  
同音で意味の似ている漢字の場合である。その場合に意味の細かい違いが  
問題になることは、次の例に見るとおりである。

- { 機・・・複雑な組み立てで、一定の働きをするもの。 ㊦ 録音機 印刷機
- { 器・・・形を持っていて、一定の働きをするもの。 ㊦ 電熱器 消火器
- { 受・・・向こうからこちらへ渡すこと。うける。 ㊦ 受賞者 受講料
- { 授・・・こちらから向こうへ渡すこと。さずける。 ㊦ 授賞式 授業料

これが同音類義の漢字の書き分けである。このことも、漢字が意味を表す  
文字であることから考えて、極めて当然のことである。

## 6. 漢字の意味と語彙——漢字熟語の場合

字体と読み方を取り上げたあと、漢字熟語を取り上げることにする。漢  
字を字音で用いる場合には、単独で用いるよりも組み合わせて熟語の形で  
用いることが多いからである。その場合に個々の漢字の意味と語彙として  
の熟語の意味との関係はどうなっているかということであるが、それぞ  
れの漢字の意味の組み合わせがその熟語の意味を構成している、と考  
えてよいのである。

例えば、「公園」という熟語の場合であるが、これについては「公」が「おおやけ・みんなの」であり、「園」が「その・にわ」である。それに基づいて、「公園」を「おおやけのその・みんなのにわ」と考えてよいのである。その点では、次のような熟語も、同じように組み立てられている。

今月（いまのつき）      水道（みずのみち）      黒板（くろいた）

新年（あたらしいとし）      休日（やすむひ）      知人（しっているひと）

これらの熟語の意味の理解に当たっても、個々の漢字の意味の組み合わせを考えることが効果的である。

また、このような漢字の組み合わせの大部分は、中国語としての文法に基づくものである。そのため、漢字の意味の組み合わせとして見た場合に、前記のように上から下へ続くだけとは限らない。中には下から上に返るものも見られることは、「読書（ほんをよむ）」の例に見るとおりである。次のような熟語も、その点では同じように組み立てられている。

開店（みせをひらく）      休講（講義をやすむ）

乗車（くるまにのる）      入学（学校にはいる）

有名（なががある）      多情（こころがおおい）

これらの熟語の意味の理解に当たっては、下から上に返る形で個々の漢字の意味を組み合わせなければならないのである。

ところで、漢字がそれぞれ意味を持っていて、その組み合わせに一定の法則が見られるとすれば、新しい熟語を造り出すこともそれほど困難ではない。こうして、次のような組み合わせが、次々と整えられるに至ったわけである。

海・・・海水    海上    海岸    海面    大海    外海    南海・・・

小・・・小品    小話    小身    小心    弱小    最小    極小・・・

入・・・入学    入会    入園    入場    収入    導入    侵入・・・

これらの中に、接頭語・接尾語を加えたものも見られることは、例えば次のとおりである。

再・・・再出発    再開発    再統制    再入学    再導入・・・



無・・・無自覚 無意識 無関心 無条件 無反省...

一的・・・個人的 女性的 実用的 自動的 経済的...

一所・・・研究所 裁判所 作業所 印刷所 営業所...

こうして、いろいろの形の漢字熟語が用いられるに至り、辞書に採録されないものも多いというのが実情である。

また、このようにして組み立てられた語の中に同音の漢字熟語が数多く見られても、それは当然のことである。それぞれの漢字に同音の漢字が多いことと、それらを一定の法則で結び付けることだけを考えても、同音の熟語が多くなるのは当然である。こうして、例えば「コウ」と「セイ」との組み合わせでも、次のような同音熟語が数多く見られることになる。

コウセイ・・・公正 攻勢 後世 恒星 校正 構成...

セイコウ・・・生硬 成功 性行 政綱 精巧 製鋼...

しかし、何ゆえこのような形の語が生まれたかということ、それぞれの漢字の意味に基づいて考えることは、それほど難しくないのである。

なお、これらのうちで特に問題となるのは、同音で意味の似ているために紛らわしい場合である。例えば、「実体・実態」「両様・両用」のような例がこれである。しかし、こういう場合も、次のように、それぞれの漢字の意味に基づいて考えなければならないのである。

実体 まこと・実際の－からだ・もの。物事について、それが本当はどういうものであるかということ。 ㊦ 生命の実体 実体が分らない

実態 まこと・実際の－さま・ようす。物事について、それが本当はどういうようすであるかということ。 ㊦ 経営の実態 実態を調査する

両様 ふたつの・両方の－さま・やり方。ふたとおりのやり方があること。 ㊦ 両様の解釈 和戦両様

両用 ふたつの・両方の－もちいる・使い道。ふたとおりの使い道があること。 ㊦ 両用の機械 水陸両用

これが同音類義語の書き分けである。このような書き分けが行われるのも、漢字が意味を表す文字である点を考えれば、当然のことである。

## 7. 漢字の意味と派生関係——意味替えの場合

最後に、漢字の意味についてその派生関係を取り上げることにする。この場合、漢字が意味を表す文字として作られたことを考えると、漢字そのものは一定の意味単位に対応すると考えてよいのである。しかし、それぞれの漢字の意味が、本来の意味から派生して、いろいろの意味に用いられていることも見逃すことはできない。そういう例の中には、その意味を日本語で考えたときに、異なる語を対応させたほうがよい場合も少なくない。そうすると、読み替えだけでなく、意味替えという考え方を導入することが必要である。

この場合、漢字そのものが一定の意味単位に対応して作られたとすれば、それぞれの漢字の意味について、これを一つのまとまりと考えることが基本である。そうして、普通に用いられる字訓が一つであれば、字訓の成り立ちから考えて、それがその漢字の意味を表すと考えてよいのである。

例えば、次のような漢字の場合であるが、その意味は、それぞれの字訓が示すとおりである。

鳥…とり    雨…あめ    買…かう    取…とる    多…おおい

また、普通に字訓を用いない漢字の場合も、その意味に当たる日本語があれば、それによってその漢字の意味を表すことができる。その点では、次のような漢字の場合も、その意味については字訓に準ずる示し方が可能である。

宅…いえ    員…ひと    看…みる    到…いたる    巨…おおきい

漢字はそれぞれ意味を持っているのであり、その意味に当たる適当な日本語があれば、それをもってその漢字の意味と考えてよいのである。

ところで、このように考える場合、どの範囲までを同じ意味とすべきかについては、二つの点に注意することが必要である。その一つは、中国語

と日本語で語の用い方に異同があるということである。そのため、文法的な性質を加えて考えると、次のような対応が見られることになる。

流…ながす・ながれる　出…でる・だす　氷…こおり・こおる

怪…あやしい・あやしむ　清…きよい・きよらか・きよめる

こういう場合はその意味に当たる日本語が二つ以上となるけれども、異なる意味と考えるには及ばないのである。その理由は、漢字と送り仮名で書き表す場合、漢字の部分が共通の意味を持っていて、送り仮名の部分が文法的異同を示すと考えてもよいからである。

また、漢字熟語の中で用いる場合、それぞれの細かい意味の違いを明らかにしようと思えば、それぞれに別の語を当てることも可能である。例えば、次のような場合も、それぞれの意味の違いを日本語で説明しようと思えば、詳しく言い表してもよいのである。

先…先頭(さき)　先日(いまよりさき)　先見(これからさき)

先決(ほかよりさき)　先制(さきにする)

先方(こちらにたいしてさき)　筆先(つきだしたさき)...

一…一個(ひとつの)　一別(ひとたび)　日本一(ひとつめ)

一様(おなじ)　純一(まじりけない)　一族(ひっくるめて)

一例(あるひとつの)　一考(ちょっと)...

このようにすれば、それぞれに当たる日本語で意味の細かい違いを表すことができるけれども、単に「さき」「ひとつ」を対応させるだけでも十分である。その理由は、漢字そのものがそれぞれの意味単位に対応していることから考えて、その意味単位に当たる日本語があれば、それをその漢字の意味と考えてよいからである。

しかしながら、漢字の意味が本来の意味から離れていく場合も少なくないのである。そうすると、中には、その意味を日本語で考えた場合、異なる意味と考えたほうがよい場合も見られるのである。例えば、次のような場合がこれである。

空…から・そら　光…ひかり・ありさま　金…こがね・おかね

足…あし・たりる　行…いく・おこなう　急…いそぐ・けわしい  
別…わかれる・ほかの　少…すくない・おさない  
長…ながい・かしら

このような場合も、それぞれの意味の派生関係を説明することは可能である。例えば、「空」の場合、文字の構成としては基本部分の「工(ジョウギの象形で、マッスグの意味にも)」に付随部分のアナカンムリを添えた形声文字になる。したがって、「マッスグなアナ・うる(空洞)」が本来の意味で、そこから何もない意味が生まれて「から」になり、何もない「そら」ともなった。しかし、「空車」は「からのくるま」であって「そらとぶくるま」ではないから、「から」と「そら」とは別の意味と考えるほうがよいのである。そうして、こういう場合に適用されるのが、意味替えという考え方である。

なお、漢字の用い方としては、その本来の意味から離れてその読み方だけを用いる場合もある。これが当て字の場合であるが、そのような用い方が慣用されると、そのままその漢字の意味として固定することにもなる。例えば、次のような国名を表す漢字などは、この種の当て字から生まれた用い方である。

米　英　独　仏　中　比　印…

こうなると、「米」には「こめ」のほかに「アメリカ」の意味があると考えなければならない。「米船」はアメリカのフネであって、コメを積んだフネではない。こういう場合にも、意味替えという考え方が必要である。

一般に、漢字については、異なる読み方で再出した場合に読み替えとして扱うのが普通である。しかし、漢字が意味を表す文字であるということを考えれば、意味替えという考え方も重視しなければならないのである。

## 8. 結　　語

以上、漢字というものを意味との関連において取り上げてきたわけである。そうして、このように取り上げてみると、そこに学習の上で役に立つ

と思われる事柄もいろいろと浮かび上がることになる。それらのうち、ここでは特に次の三つの点を強調しておきたいと思う。

その第1は、どういう場合に新出漢字として扱うかということである。従来は字種として新しい漢字が出てきたときにそのつど新出としていたが、それらをすべて全くの新出とするには及ばないということである。漢字の中には構成要素の組み合わせと考えられるものが多いことは、ここで指摘してきたとおりである。したがって、そういう場合には、構成要素としてそれぞれ既出であれば、それを組み合わせた漢字が全くの新出ではないということである。

次に、どういう場合に新出語として扱うかということである。この場合も、漢字熟語としてそのつど新出扱いをするには及ばないということである。その理由は、漢字熟語というものが個々の漢字の組み合わせで組み立てられているために、個々の漢字としては既出の場合も多いからである。

最後に、読み方が変わったときに読み替えとしてきたことに関連し、さらに意味替えという考え方を導入するのが効果的だということである。漢字が意味を表す文字だということを考えれば、読み替えよりも意味替えのほうが重要だとしても言い過ぎではないのである。

最初にも触れたとおり、漢字学習の難しさの一つは、その字種が多いことと、それを組み合わせた漢字熟語が多いことである。そのため、漢字というものをローマ字のような文字と同じに扱おうとしても、学習の負担が増すばかりである。その場合に、学習の負担を多少とも軽減しようと思えば、ここで取り上げたような考え方が役に立つに違いないのである。

#### 参考文献

- 藤堂明保「漢字語源辞典」(学燈社)
- 加藤常賢「漢字の起源」(角川書店)
- 武部良明・他「角川最新漢和辞典」(角川書店)
- 武部良明「常用漢字用字用例辞典」(教育出版)